「私が経験した事、考えたこと」　～選択から始まる子どもの自立～

2020 年 8 月 30 日　島田　直子

我が家には、エンパワメントスクールに通う高校 3 年の娘がいます。下には、中 3、小 5 とつづいています。長女の受験、高校生活を通じて感じたこと、考えさせられたことは、今の私達に大きな影響を与えたと思います。

〇長女、愛

愛は幼い頃から周りに比べて何ごとにもゆっくりだった為、就学の半年前に、保健センターの方より、小学校での支援学級在籍を勧められました。私達は悩んだ末、支援学級に在籍することを決めました。その理由としては、私が長男を妊娠しており、今までのようにきっちりと愛を見てあげられないと思ったこと、そして、周りの意見として、愛を支援学級においてあげることが将来の為になると、言われたことでした。

しかし、私達夫婦の葛藤は入学式まで続き、最後は小学校の先生方に説得されての支援学級在籍となりました。その後、小学校 4 年生の終わり頃までは、全ての時間をクラスで過ごしていましたが、次第に朝の起床が難しくなり、頭痛や聴覚過敏と、だんだんと体調を崩し始めました。心配になり、病院で診ていただいたところ、起立生調節障害という事が判明しました。

その後は、小学校 5 年生から中学 3 年生までをほぼ支援学級で過ごす事になります。愛は、クラブ活動(朝練習)や、学校行事には全て参加していましたし、欠席もほとんどありませんでしたが、授業はほとんど不参加という不思議な学校生活を送っていました。その為、定期テストを頑張っても、散々な評価でしたが、私達はなんの疑問も持ちませんでした。

中 3 の夏になり、支援担からは、私立か高等支援学校、支援学校高等部、もしくは自立支援コースや共生推進コースのある高校への進学を勧められていました。

それにも疑問はありませんでした。なぜなら、私達は、中学 1 年生の段階で、今までの支援学級在籍者で公立高校進学者はほとんどいなかったと聞いていたからです。

そんな時でした。友人から誘われた、北河内連絡会のチラシを見て、なんの気無しに参加することになりました。そして、皆さんに我が子の置かれている状況をお話しし、そこで私は初めて、娘が公立高校を受験することができると知りました。

〇公立高校受験への思い

帰宅後、私はすぐに家族に、その日に聞いてきた話を伝えましたが、まだみんな半信半疑でした。その後、愛と話しあうことになったのですが、愛は、実は担任の先生からエンパワメントスクールの話を聞いていたということが分かりました。

私はすぐに学校へ連絡をして、急いで懇談会のやり直しをお願いしました。学年主任、進路担当、クラス担任、支援担任との懇談が始まりました。先生方からは、もちろん公立高校受験は可能であるということ、また、いろいろな公立高校がある事を教えてもらいました。

その中に、現在通っているエンパワメントスクールが入っていました。担任の先生は、「知人がそこで教師をしていて、色々話を聞いている。一度見学に行ってはどうか？」と、言ってくれました。私達は早速、公立高校進学フェアへ行き、そのブースでその学校の先生と話をすることが出来ました。

その時の担当の方から、「自分の子供も起立性調節障害を持っていたが、今は頑張って働いて

いる」と言うお話をきき、私達の中に、何か今までにない明るい兆しが見え始めました。その時点で愛はほぼ心を決めていたと思います。

7月の引退試合後は受験勉強の日々でした。授業への欠席はその後もつづいていた愛は、定期テストで少しでも高い点数を取るしかありませんでした。私達は少しでも授業に参加することをすすめましたが、愛としては、今さらクラスに入るということに強い抵抗があり、結局最後までほぼ入室は無理でした。

それでも愛の硬い意志は揺るがず、厳しい内申点をつけられても、そこしか行かない！と言う信念だけで頑張り続けました。夜遅くに愛を塾に迎えに行きながら、話をしたときに、何度か言っていた言葉があります。それは、「私、もう一度やり直したい。学び直したい」と言う言葉でした。私は見守るしかないと思いました。

ちなみに、愛の通う高校は自宅から、約1時間半かかる場所にありました。となると当たり前ですが今よりかなり早く起きていかなければなりません。愛はその頃、まだまだ起立性が酷かったので本当に通うことが出来るのか、とても不安でした。何度も学校公開に通い、通学手順を覚えました。

〇受験と心の変化

いよいよ受験の日が来ました。いくら頑張っても上がらない理科の点数に不安がありましたが、エンパワメントスクールの試験には面接もあり、学校の先生からは面接に関しては問題ないと言われていました。

また、念のために受けた私立高校も合格していたので、高い倍率ではありましたが、ダメでもともとと思い受験しました。結果、合格しました。私達は無言で手を取り合い、固く握手をかわして喜びました。

愛の受験が終わり、私がほっとした矢先、愛に少し遅めの反抗期がやってきました。愛は、自分で勝ち取った合格に今までなかった自信を持ったと同時に、自立への第一歩を歩き始めていたように思います。それまでは、親や先生の言う事は全て受け入れていた子が、急に反抗し始めた事で私は悩み、担任の先生に相談することにしました。

私の話を聞きながら先生は私に、「お母さん、それが当たり前なんですよ」といってくれました。私はその時初めて、私が愛を特別視していたこと、過剰に守りつづけていたことに気がつき、そして愛が少しづつ、私達から離れて行く時期が来たと感じました。

〇高校生活、本当の学び直し

入学にあたり、学校と個別の面談をしていただき、病気のことや支援学級在籍だった事など心配な事をお話しました。高校の先生方は、病気に対してなるべく配慮してくれると約束してくださり、いつでも相談してくださいと言ってくださりました。

いざ通学が始まると、色々と問題が発生しました。まず、登校です。愛は毎朝7時前に家を出ます。初めは緊張でお腹を下し、朝ごはんを食べられない状態で、遅刻もしていました。しかし体調のことなどは、事前の懇談会でお話ししていたので、本来の遅刻者へ課されるペナルティは免除していただくことができました。

次に発生した問題は、クラスメイトとの関係でした。ほぼ5年間、クラスで過ごすことがなかった娘にとって人間関係を築いていくことはとても難しく、相手との距離の取り方や気持ちの表し方に苦労しました。

そのことを悩み、色々な方に相談して私が感じた事は、いつのまにか私達大人が愛の周りに

散らばっていた、大切なトラブルという経験を排除してしまっていた結果だと感じました。
　私は新しい仲間作りに、クラブ加入を勧めました。中学で入部していたバレー部に入りましたが朝練があり、以前よりも更に早起きをしなくてはならなくなりました。そして、そこでも人間関係が難しくなってしまい、本人から「もうやめたい」と告げられました。
　バレー部は１ヶ月で辞める事になりましたが、そこで愛は、退部にあたってのやりとりを全て一人でこなしたり、合わない人とのやりとり、悩みを先輩に相談する勇気、喧嘩をしても最後には優しくしてくれた仲間と出会い、人に対して頑なだった気持ちが変化し始めました。
　その後は自分で決めた卓球部に入部し、現在に至っています。

〇勉強と試験

　勉強では、1 学期早々に赤点(定期テストでは 40 点以上を取らなくてはいけない事になっています)を二つも取ってしまい、親子であたふたしました。
　しかし、愛の高校はテストの点数プラス授業態度、提出物などもすべて考慮して通知表の点数をつけてくれるので、結果的には欠点になりませんでした。それでも、あまりにひどい時は課題を出されます。
　総合的な評価をしてもらったおかげで愛は三年生まで上がることができました。また、提出物をなくしてしまった時の先生と交渉をするというやり取りを覚えました。
　人間関係ではいじめもありました。
　これも、本来なら中学校で経験することだったのかもしれませんが、いつも少人数で常に大人が介入できる状態の支援学級では無いことでした。泣きながら行きたくないと言う娘と学校の門まで一緒に登校したこともありました。
　本人はとても辛かったと思いますが、以前、担任の先生から、「遅刻してもいいけれど、休まないでください。将来の進路のためにも欠席はいけない。」と言われていたので、例え 5 分でもいいからと、学校へ行かせました。頑張っていくと、友達が迎えてくれ、一緒に愚痴を言いあえるようになりました。
　いつのまにかいじめの的は変わります。その残酷さも高校で身をもって知ったのだと思います。精神的にも肉体的にも過酷な高校生活をここまで頑張れたのは、やはり、「自分で決めた事」その一言だと思います。
　私が、色々な課題にぶつかり、辛そうにしている娘に、「やめてもいいよ」と言うと、愛は必ず、「辞めない！」と返してくれました。本心を言うと、ぬくぬくと学校生活を送ってきた私達親子は高校に対して、今までのように、何かあると早めに大人が介入してトラブルを解決してくれると期待していました。
　学校は、トラブルに対しての反応は早かったものの、対応はどうかと言うと、期待とは違っていました。でも、私はそれがよかったと思っています。だからこそ娘は沢山の事を感じ、体験し、考えられたのだと思います。
　それは私も同じでした。心のどこかで、エンパワメントスクールを特別な高校と思い、支援学級と同じように考えていたのかもしれません。でも、そこは、学習の学び直しができる、一般的な高校でした。そして、だからこそよかったのだと思っています。
　勉強も、人としての成長も学び直せた、とても大切な三年間になると思っています。

〇きょうだいのこと

　ここまでは長女のことをお話ししましたが、はじめにもお話ししたように、我が家には三人

子供がいます。次女の咲は中学３年生、長男の有は小５学年生です。
　有は自閉症の特徴を持っています。乳児の頃から子育ては難しかったのだと思いますが、初めての男の子で、疑問に思っても深刻には考えていませんでした。
　３歳の頃に療育園を勧められてやっと彼を少し理解できるようになりました。ちょうどその頃、長女の体調が悪くなり始めており、少し個性的で感受性の強い次女も学校に慣れるのに必死なときでした。
　とにかく毎日が嵐のようでした。
　長男に知的障害があり、これからどう育てればいいのか分からず、必死に情報を集めていました。療育園を出て、二年間幼稚園に通うとなったときに色々な先生達に止められましたが、私達は長男を小学校までは地域に入れると決めていたので、その気持ちを貫き通しました。
　幼稚園生活は、私にとって、厳しいものでした。特に辛かったことは、今まで地域と離れてしまっていたことで一からの人間関係を築かなければならなかったことでした。
　そしてもう一つは、我が子はみんなと違うと強く感じ過ぎてしまい、周りに心を開けず、勝手に一人で抱え込んでしまったことでした。私は二年間悩みまくりでしたが、当の本人はというと、ワーワー泣き騒ぎしながらも楽しく過ごしていたように思います。
　その時に、ありのままの息子を受け入れて一緒にいてくれたお友達に感謝するとともに、子供って凄いなあ！と、私に刺激を与えてくれました。
　そしてあっという間に二年間が過ぎ、小学校の事を考える時期になりました。訓練の先生に、癇癪をおこす息子をみながら、「この子は一人では何もできないけれど、少しの支援でできることが沢山あるんだよ」と言われ、支援学校を勧められましたが、やはり私達夫婦の意志は変わりませんでした。
　ここで地域を離れたら忘れられてしまう！繋がりが無くなってしまう！と、感じました。入学すると、やはり、毎日が戦いで、息子は次女と集団登校する事になりました。私は、その最後尾をついて行くことにしました。
　泣き騒ぐ息子を抱えて教室に入ったり、床に転げ回るのを見守ったり、これからどうなるのかと過ごしていました。
　ある時、咲が怒りながら帰宅しました。理由を聞くと、近所の男子と喧嘩になり、「お前の弟はアホだから支援学級だ」といわれたから、また喧嘩したとのことでした。私はその時、周りの環境と長男とのやりとりで必死でした。そして思わず次女に、「近所の子と何で喧嘩したん！弟のこともあるのに！みんなとうまくやって！」と、言ってしまいました。
　それから、次女は弟を全く可愛がらなくなり、私ともあまり話をしなくなりました。私はそこでやっと気がつきました。みんなそれぞれ甘えたかったり、不満があっても我慢してくれているのに、何であんなことを言ってしまったのか。私は自分の事しか考えていなかった。
　私はその日から、咲と話す時は弟の話をやめ、彼女の話だけを聞く事にしました。
　二週間ほど経った頃、また咲が有と遊ぶようになりました。からかって怒らせたりもしますが、今も一緒に文句を言いながら楽しそうに過ごしています。面白がりながら一緒に買い物にも行ってくれます。
　そんなこともありながら、日々を夢中で過ごしていた時に、長女の受験を通し、どの子にも同じように将来の選択肢は与えられるべきなんじゃないか？勉強ができない、会話がスムーズにできないからと、周りの大人が進路の選択肢を狭めるのはおかしのではないか？と思うようになりました。
　その頃、障害があっても高校に楽しく通っている方や、成人して楽しくお酒をのんでいる方々

と出会い、自分の中の考えが変わり始めました。
　障害があっても諦めなくていい事が沢山あるのに、障害があるからと、周りが本人に選択させないのは違う。初めから諦めるのではなく、みんなと同じようにしてみてから考えてもいいのじゃないか？と、思うようになりました。
　大人は、子供のことを考えて、良い方向にと個別をすすめたり、本人の理解力にあったものを勧めてくれたりします。それは本当に本人を思っての優しさだと思いますし、感じます。
　でも、もしかしたら、本人は望んでいなくて、みんなと同じものを持ちたい、おなじように役割を与えて欲しいと思っているのではないか？と、長男が成長するにつれて感じるようになりました。
　あんなに心配した小学校生活でしたが、周りの子供達は今も息子をありのまま受け入れてくれて、みんなとおなじように、からかったり、遊んだり、話しかけたり、喧嘩もします。もちろんみんながみんなではありませんが、息子をクラスで必要としてくれている仲間がいるということは何よりも幸せな事だと感じています。

　私は三人の子育てから、自分で選択する事から自立ははじまるのだと、学びました。

　長女は義務教育が終わる、そのときに自分で進路を選択し、本当の自立が始まりました。そのときに親はそっと離れて見守る事しかできないのかもしれない。そのことを私は子供達から学びました。まだまだ子育て真っ最中で、日々迷ってばかりですが、これからも子供達の選択を見守っていこうとおもいます。